

残されて、生きる

野瀬節子

中央三丁目

昭和二年生まれの私は、幼い時から、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と、勝つために耐え忍ぶことを教育され、それを信じて来た。昭和十九年、広島第一県女五年の六月、学徒報国隊として、学業を離れ、呉市広町第十一海軍航空廠に動員された。広島駅から貨車に乗せられ、広町に着き寄宿舎に入る。六人部屋押入れ式二段ベッド、前の住人が男子工員であったため、ノミ、南京虫になやまされた。

海軍式の敬礼をし、軍人勅諭を毎朝唱し、『神風』と印刷された鉢巻きをしめ、軍歌を歌いながら出勤した。飛行機が一番大事な発動機の歯車を研磨して仕上げる。男の工員は次々と召集され、機械を一人で操作し、国のため勝つまではと、十七歳の少女たちは必死だった。私達の作った発動機で、飛行機は本当に飛べるのかしらと、心細い思いもあり、友達と話し合ったこともあった。一日、三交替の勤務で、冬の凍てつく夜、夜空を眺め、友と夢を語り、夜明けの空の美しさに心打たれ、道端の雑草の中の犬ふぐりの青い小さな花を愛でた。今も犬ふぐりの

花を見つけると、あの頃の生活を思い出し、感無量になる。休憩時間に、軍歌ではなく、外国の歌曲を静かに歌ったことをなつかしく想う。悲しいまでに純心で清廉だった私たち女学生の心を、踏みにじったものは、何だったのであろう。

先生志望の私は、消燈後、布団をかぶり、懐中電灯で勉強した。広島女専に合格できたが、将校に「国破れて山河あり、国破れて学問ありや」と、進学するものは集められて、国賊とまで言われ叱られた。その頃、日本はもう負け戦だったが、私たちはわからなかった。女専の入学式が延期になり、そのまま工場に残り働いた。

五月五日、工場はB29約二五〇機の波状攻撃の大空襲に合う。トンネルに逃げた。爆風のため体は浮き、次々逃げ込む人たちが押し下敷きになる。「お母さん助けて」と、あちこちで叫び声がある。私もここでは死ねないと、母の名を呼びながらもがいていた。誰かに手を引っぱられ奥の方に逃げる事ができた。圧死した人もあったらしい。空襲が終りトンネルを出て驚いた。

工場は鉄骨だけになり、血を流している人々。私は靴がなくなり裸足で友達と宿舍まで帰り、生きててよかったと友と抱き合
って泣いた。

作業がトンネル工場に移った。私たちは死を覚悟していたよ
うだ。その頃の日記に「神風特別攻撃隊の人たちに恥じない自
分でありたい」としきりに書いている。

七月に入り急に女専の入学式に帰るよう言われた。勉強が始
まった。広島は空襲らしいものもなく建物疎開が始まっていた
が、静かな軍都だった。家は播磨屋町で中心地だったので、夜
は父が家に残り、女、子供は郊外に疎開することになり、七月
末、牛田に移りそこから学校に通うことになった。

八月六日、講堂で朝礼、校長訓話が終り、起立し、礼をし、
顔を上げた時、B29の爆音。警報が解除になったのに変だなど、
窓の方を見た。その時、あの閃光！マグネシウムを何千と集
めたような光！とつきに椅子の下に潜り目鼻耳を両手で塞ぎ、
気を失ったよう。遠くの方で「ドーン」と音を聞いたような気
がする。「下敷きになったものはいないか」と教頭先生の声。「こ
こにいます」「這って出てこい」、講堂の中心にいた私は、校庭
の防空壕に入った。その中には砲部隊の兵隊が十人ぐらいい
た。

何が何だかわからなくて、しばらくして外に出て見て驚いた。
あのガラガラした夏の空は、どこに行ったのだろう。すべての

音は無く、静かな夕暮れ色に一変し、遠くの方の家が二、三軒
ぼーと燃えていた。校門の方に行つて見る。元気な人は寄宿舎
に助けに行けと言われ、四人で雨戸を持って向かった。学校は
皆実町二丁目なので御幸橋を渡る。灰色のシーツのボロを被っ
たような大人や子供がゾロゾロと歩いてくる。訳のわからぬ恐
ろしさの中、電車通りを進む。両側のつぶれた家から「助けて」
と声がする。まだ火は出ていなかった。馬が車道でひっくり返
つて死んでいた。

途中で、寄宿舎の人は皆避難したから帰れと言われ、また学
校に戻つた。今度は共済病院に手伝いに行く。「薬がない。赤チ
ンもない」の声で、学校に戻つたような気がする。このあたり
の記憶はさだかでない。何をしていたのか、時間もわからず、
昼食をしたのか、何も覚えてない。空白の時間だ。「帰っていい」
と先生の声。友達四人で猿猴川の土手を下り、引き潮だったの
で川の中を上ることにした。土手から川の中はケガ人で一杯だ
った。「ケガ人は舟に乗れ。島へ連れて行く」と言っていた。

鶴見橋近くまで行つた時、憲兵が「市中は火が出た。橋は渡
れない」と叫んでいた。家には帰れそうにない、また学校に戻
ることになった。比治山を越えて学校に帰ることになった。あの
比治山が足の踏み場もないケガ人で山が埋まっていた。皆うつ
ろな目で「水！」「水！」と言っている。水をあげると死んでし
まうと言われてたので、どうしてあげることができない。肩か

らかけていた非常袋の中から、カンパン、包帯、三角巾など持っていたものを一つずつ置いて歩いた。昨夜、燈火管制の中で仕上げた女專の制服の入っている鞆も、どこかに置いてきてしまった。

学校に辿りついた。一人息子だった兄が陸軍司令部に勤めていたので、私がこんな目に合っているのに迎えに来てくれないのかと、心の中でどうしてと恨んでいた。兄は即死していたのに……。夕方まで学校にいた。夜になると帰れなくなると思い、友達四人で、また帰ることになった。誰も情況がわからないので、電車道を歩けば帰られると、皮肉にも爆心地へと歩いて行く。

途中、陸軍の将校が「自宅の様子を見に行くから一緒に」と言われ、後について歩く。両側に人々が真黒に焼け人形のように転がっている。アスファルトの道が溶けて靴にくっつく。一足ずつ力を入れ足を抜きながら進む。こわれた水道から水があふれていて、タオルを水に濡らし顔に当て、熱風を防ぎながら街を歩く。

国泰寺の大きな石燈樓が立ったまま真中の石が飛び抜けそのまま低くなって立っていた。革屋町の停留所から父がいるわが家の方を見ると、丁度くずれ落ちる所。三階だったので焼け落ちるのがおそかったようだ。熱風の中、紙屋町から西練兵場へと向かう。紙屋町の住友銀行の玄関のみかげ石に腰をかけて、

そのまま焼けていた人をみた。この辺りは爆心地に近い所、歩いていて人はなく、チリチリになった髪に真黒に焦げた体、目だけ私たちを追う人。

練兵場に入ると足の踏み場もない位、死体がゴロゴロ、焼けて縮んで小さくなった兵隊さん。護国神社は鳥居だけ立っていた。広島城も、五師団司令部も、陸軍病院も何もない。あるのは死体ばかり。あたりは静寂そのもの、声も出さず、ただひたすら牛田の家に帰ることだけ。工兵隊（吊り橋）を渡り、そこで友達と別れ一人で家に急ぐ。

「ただいま」。「節子が帰ってきた」と母が喜んだ。母は兄の二歳の娘を預かっていて、丁度トイレに連れて行って、助かった。家は天井が吹き飛び、玄関とトイレが残っていた。間もなく妹が「お母さん」と泣き声で帰ってきた。女学校三年で高須の工場に行っていて、黒い雨に打たれ帰ってきた。

次に父が帰ってきた。江波の山陰の知人の家にて助かったが腕にケガを少ししていた。あたりを見廻すと、遥か向うに私の紺色の浴衣が木にひっかかりヒラヒラとしている。五升入りの梅干しの瓶が台所から庭に飛ばされ鎮座している。

夜になり警報が出たので、小川の側で母と妹三人で野宿をした。父は兄が帰って来ないので、四里奥の可部町の兄嫁の実家まで夜通し歩いて往復し、夜明けに帰ってきた。父母は次の日から兄を探しに毎日出掛けた。私と妹は留守番。

町会から奉仕に出るよう言われ、隣家の娘さんと出る。なんと神田川に一杯浮いている死体を、鳶口で引っかけ、土手に上げ、それを大八車に積み死体焼場に運ぶ。その車の後押しをするように言われた。大八車の上には、水で死体は膨れ上がり、仁王様のように唇がめくれ、手足の指はまるく腫れ、目玉はギョロリ、怖くて……こんな怖い姿はない。とても後押しなんかできない。二人で逃げて帰った。毎夜死体を焼く匂いが、風に乗ってきた。

一週間過ぎても兄は見つからなかった。この家では生活できないので、可部町に疎開することになり、残った家具を、借りた大八車で父が引き、母と私が後押しで、夜出発した。牛田から白島に出て横川橋を渡ろうとした時、橋の側に死体を焼いた骨が山のようにつまれそこから燐がポロポロと青い光を放っているのを横目で見ながら黙って歩く。夜中に可部に着き、荷をおろして、朝までに大八車を返す約束なので、帰りは母と私は車にのり、父が引っぱってくれた。古市で夜が明け始め、休憩した。空を眺めていたら、十五夜のような大きな月の下にユラユラとオレンジ色の物体が広島の方から飛んで行った。火の玉だ！無言のまま見つめていた。

十四日、妹も一緒に可部に行く。義兄（姉の夫）が出勤途中左官町の電車で首にケガし、火傷をして帰り、床に伏していた。姉の手伝いをしていた時、義兄の首から急に血が吹き出し、姉

は配給のタバコの葉で血止めをした。背中が黒ずんでいた。

十五日昼、ラジオのニュース。ガーガーと聞きとりにくい。義兄は涙をポロポロと流し、「今のは終戦を告げる天皇陛下の言葉です」と言った。「日本は負けたのね」と私。早くよくなりたと言っていた義兄は目を閉じて黙ってしまった。その夜から、電燈から黒い布は取り外され、明るい夜になった。

十六日、姉と私は義兄にウチワで風を送っていた。義兄が急に鼻をピクピクさせた。私は姉を見た。義兄の呼吸が止まった。両親を呼びに走った。終戦になったのに死んでしまった義兄。

毎日のように親類縁者の葬式ばかり私は甥姪をおんぶして焼き場によく行った。九月一日には兄嫁まで亡くなり、そんな明け暮れが秋までつづいた。ケガをした叔母は赤チンを顔にぬって、お化けのような姿で寝ていた。兄や姉の幼い子、四歳を頭に四人わが家にいた。親が亡くなったこともよくわからず、四人で仲良く葬式ごっこをして遊んでいた。ホーキ、ハタキをかついで、ムニヤムニヤとお坊さんの真似をして、並んで歩く。父母はこの幼い孫をかかえ、気も狂わんばかりだったと思う。

ケガをしなかった私は、寺に収容されたケガ人や孤児たちの食事の手伝いの奉仕に出た。寺の廊下に座布団を一枚づつ貰い、泣きもせず、黙って座っていた幼児。空缶にお粥を入れて廻った。ケガ人は傷口にウジが盛り上がってわき、箸で取っている。今思えば、この世のこととは思えないようなことの連続だった。

八月六日以来、神経も麻痺し、ああしてあげればよかった。こうもしたかったと、申し訳ない思いで一杯だ。兄はついに見つからず、骨のない葬式をし、両親はどんなにかくやしい思いだったことと思う。

原爆とは知らず、爆心地を歩いて帰り、二次放射能を浴び、この世の地獄を見た。負け戦なのに政治家にだまされ、死ななくてもよい人が殺され、くやしい。平和のための犠牲だなんて言っただけでほしくない。無駄死だ。愚かさの極みが原爆である。

死んだ多くの友達がどんな思いであつたかを思う時、もう二度と戦争などない世になるよう、みんなで核廃絶、戦争反対を唱えよう。終戦五〇年を迎えようとしている今、記憶もおぼろになりかけた。

昭和二三年、結婚して東京住まいになり、娘二人生まれ、無事に育ち結婚した。若い頃は原爆の事にはふれない生活をしてきた。広島との手紙の往復は、GHQのプレスコード（報道管制）のため、検閲された。原爆のことは一般の人には話してはならないことと自然に思わされる状況だった。貧血はつづき青い顔をしていたが、後遺症だとは思わず、がまんしていた。どんなことも、耐えることしかないと黙して、心はどこか醒めていた。

無差別に原爆のため死んで行った若い命を思う時、そして生き残った人は後遺症に苦しみ、人に話せない体の不安、五〇年

もこれらのことを引きずって来た被爆者の心を、怒りを、ぶつきたい。生き残りのこの命を、感謝してこの世と別れることができるよう、亡くなった人々の分まで大切に生きて行きたいと思うこの頃だ。

